

[試験紹介]

気候変動に対応した麦類の「気象感応調査」

【背景】

麦類研究室では、大麦・小麦の県主要品種の生育状況を毎年調査しています（「気象感応調査」と言います）。結果は関係者に提供され、生産現場における栽培技術指導等に活用されています。

地球温暖化の影響により、麦の生育は早まっています。生産現場では麦の過剰な生育を抑えるため、播種期を遅らせる等の技術対応を図っています。このため、生産現場では播種期が長期にわたり、それに対応した情報の提供・播種期の違いが生育、収量や品質に与える影響の検証が課題となっています。



写真1 「麦類気象感応調査」の試験圃場

【これまでの試験経過及び今後の予定】

今年度から、県内の主要品種であるビール大麦「ニューサチホゴールデン」において、従来の播種期（11月上旬）に加え、新たな播種期（11月中旬）を設定して調査を実施しています（写真1、2）。これにより、より生産現場の状況に近い調査データの取得が可能となります。今後、定期的な調査を行い、調査結果を随時発信していくとともに、暖冬でも安定した収量が得られよう、累年データを積み重ね、播種期の違いが生育、収量や品質へ与える影響を調査していきます。



写真2 試験区の調査の様子

(麦類研究室)

[試験紹介]

にら黄化腐敗症状の原因解明に向けて

にら黄化腐敗症状は、2022年頃から、県西部のにら産地で発生が確認されています。本症状は、2月から4月頃にかけて外葉から黄化し、重症化すると株全体が萎れ、収量の減少や出荷調製にかかる労力の増加につながるため、問題となっています（写真1）。

本症状が見られたにら株から菌を分離したところ、ネギ属作物に腐敗性の症状を引き起こす細菌が複数分離されました（写真2）。そこで、これらの菌を用いてにらに対する病原性の確認を行うとともに（写真3）、収穫時の鎌からの感染やネダニ等の微小害虫の関与について、発病メカニズム解明に向けた試験を行っています。



写真1 現地の様子

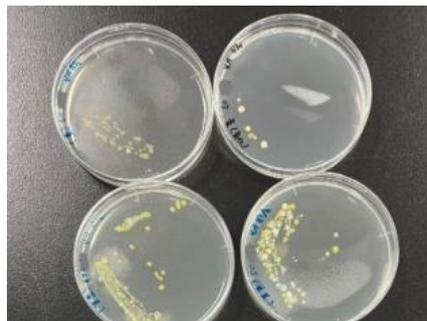


写真2 分離された菌



写真3 分離菌を接種したにら株(左)と無接種株(右)

(病理昆虫研究室)